

# トルストイとゴーリキー、『幼年時代』研究

## ——自己と他者のまなざし——

大川 良輔

### 1. ロシア自伝小説 (автобиографическая проза) における、貴族階級の「幸せな幼年時代」の神話

ロシアにおいて自伝小説が占める位置は決して小さくない。19世紀から多くの著名な作家たちが、この自伝小説のジャンルを手がけてきた。ロシアの自伝小説の嚆矢として最も重要なのが、Л.Н.トルストイの作品である。彼にとって幼年時代の思い出は、汚れを知らない幸福な「黄金時代」として常に想起された。ロシア自伝小説の主たる特徴は、まさにこの、描写された幼年期自体の「汚れのなさ」にある。それは人生のうちで最も幸せな時期であり、いくら焦がれても、もはや戻ることもしつこく触れることもできない、完全なる美しさに満ちている。

19世紀ロシアの、広大で豊富な文学的潮流のなかで固定化されていった、一つのジャンルとしての擬似自伝文学 (pseudo-autobiography)<sup>1</sup> を通じて、貴族階級の「幸せな幼年時代」という神話が段階的に形成されていった。ロシアの自伝文学は、J.J.ルソーに代表される近代的な西洋の自伝小説に特有の「自我の苦しみを描く」という点よりも、「幸せな過去の記憶を描く」という点を重視している。もちろん、これらの作品の中に、「自我の苦しみを」が描かれていないということではない。基本的に、幼年期から青年期へと至る子供の内的な成長と、その成長の過程で、自我が確立する上での葛藤の描写が貫かれていながら、さらにこれとは別のトーンで「幼年期」にも注意が払われている、ということである。その意味でロシアの自伝文学は西洋の自伝文学よりもノスタルジックな傾向が強く、ある意味ではユートピア小説のひとつのバリエーションと考えることができるだろう。

この「幸せな幼年時代」の神話は、トルストイ (『幼年時代』(1852)、『少年時代』(1854)、『青年時代』(1857))、アクサーコフ (『家族の記録』(1856)、『孫バグロフの幼年時代』(1858)) らによって作り上げられたものである。これらの作品のうちには、ある一定の共通のモチーフが存在する。その共通モチーフとは、語り手 (または作者自身) の回想と記憶によって

<sup>1</sup> 擬似自伝文学 (pseudo-autobiography) という用語は、ロシア自伝文学の研究者、アンドリュー・ワフテルによる。擬似自伝 (pseudo-autobiography) は自伝 (autobiography) そのものではなく、自伝の形式を用いた「小説」のひとつのジャンルのことを指す。Andrew B. Wachtel, *The Battle for Childhood: Creation of Russian Myth* (Stanford; Stanford University Press, 1990).

補完されてできあがる「完全なる母親のイメージ」や、一般的にこれらの自伝的作品群を貫く「ノスタルジックな調子」、何よりもまず、幼い主人公の、肉体と心理の成長過程における「汚れのなさ」などである。

これらの共通モチーフの詳細な考察にはここでは触れない。筆者は、これまで自伝小説における自己と他者の関係性に特に着目してきた。今回は、この自己と他者の関係性に直接結びつく、他者のまなざしというテーマが、トルストイとゴーリキーの『幼年時代』の中にどのように現れるか見てみることにする。

## 2. 汚れの無い幼年期

トルストイの考える幼年期の概念の基礎には、当時彼が傾倒していたJ.J.ルソーの強い影響が窺える。トルストイは『幼年時代』の有名な一節で、「幼年期」を次のように回想する。

Вернутся ли когда-нибудь та свежесть, беззаботность, потребность любви и сила веры, которыми обладаешь в детстве? Какое время может быть лучше того, когда две лучшие добродетели – невинная веселость и беспредельная потребность любви – были единственными побуждениями в жизни? (45)<sup>2</sup>  
私たちが幼年時代にもっていた、あのすがすがしい無心な気持ち、愛の欲求、信仰の力、これらのものはまたいつか帰ってくるだろうか？二つの最も優れた善行——無邪気で快活な心境と、限りない愛の欲求とが、唯一の生活の動因であった、あの時代よりも美しい時代が、果たしてありうるだろうか？

ここでトルストイが想定するのは、無邪気で、純粋な心から溢れる感情に満ちた、「幸福な」幼年時代である。幼年時代の子供の内にあるこの純粋な感情は、他人によく見られたいといった願望や、しっかりした人間に見られたいといった虚栄心によって次第に歪められていくものである。トルストイにとっては、幸せなのは穢れない幼年期のみであり、成長することによって子供らしい純粋な感情は墮落していくのである。『幼年時代』の中の、虚栄心についての考察は、そのことをはっきりと示していると言える。

Тщеславие есть чувство самое несообразное с истинною горестью, вместе с тем чувство это так крепко привито к натуре человека, что очень редко даже самое сильное горе изгоняет его. Тщеславие в горести выражается желанием казаться или огорченным, или несчастным, или твердым; и эти низкие желания, в которых мы не признаемся, но которые почти никогда – даже в самой сильной печали – не оставляют нас... (91)

<sup>2</sup> トルストイの作品の引用部分は全て *Толстой Л.Н. Полное собрание произведений в 90 томах. М.-Л., 1928-1958. Т. 1* により、( ) 内にページ数のみ記す。日本語訳は大川による。

元来虚栄心と言うものは、真の悲哀と全く相容れない感情である。けれどもそれと同時に、この感情は人間の本性に硬く食い込んでいるので、最も痛烈な悲哀でさえ、この感情を駆逐し尽くすことは極めて稀だ。悲哀の場合における虚栄心は、あるいは不幸なものに見せかけようとか、あるいはしっかりと人間に見られたいとか、そうした欲望によって表現される。これらの下劣な欲望は、私たちが自分でそれを認めないでも、ほとんど常にどんな激しい悲哀に沈んでいるときでも私たちに付き纏ってはなれない。

トルストイは、純粋な存在、穢れないものの存在を常に想定する。強い自尊心や見栄といったものの影響を受けない庶民が、その存在として現れる。トルストイにとって尊大な虚栄心の影響を受けないものとして貴族と対比される庶民たちは、常に純粋な存在であり、「庶民は勤労と苦難に満ち溢れた人生のために、我々よりはるかに高い位置にいる」<sup>3</sup>のである。

### 3. トルストイ『幼年時代』における「意識に取り込まれる」他者のまなざし

トルストイの『幼年時代』では、十歳になったばかりの幼いニコレーンカの複雑な感情の目覚めが描かれている。その幼い主人公の精神的成長や自意識の芽生えと密接に関係しているのが、他者のまなざしである。トルストイの自伝三部作の読者は、その作品中に、主人公ニコレーンカが恥ずかしさや侮辱を感じる場面が極めて多いことに気づくだろう。『幼年時代』では特に後半部、小説の舞台が田舎の生活から、華やかな都会の暮らしへと移行した後、こういった場面が増大する。主人公を見つめる他人のまなざしは『幼年時代』の作品内では、強い自尊心と、その自尊心によって生み出される恥の概念と密接に関係している。幼い子供たちの内的成長と自己形成につねに深く関わっているのは、「他人にどう見られているか」という意識であり、子供達はそのことを考慮に入れ、自己を取り巻く社会状況の中で自己を形成させていく。幼い主人公ニコレーンカも、他人が自分のことをどのように見ているかということをおろそかにせず先回りして想定し、自己の行動の指針としていくのである。この結果、ニコレーンカの中に「他人に良く見られたい」という虚栄心と、他人の前で失敗を犯したときの羞恥心の感情が生じてくる。この自己の内面に取り込まれた他者のまなざしに、幼い主人公ニコレーンカは常に取り巻かれて生活していく。それでは少年ニコレーンカは周囲の人間に、一体どのような人間に見られたいと思っているのだろうか。

---

<sup>3</sup> Толстой Л.Н. Полное собрание произведений в 90 томах. Т. 46. М.-Л., 1928-1958. С. 95.

## ① 大人に見られたい

ニコレンカの内面は、作品を通じて、段階的に子供から大人へと成長していくその過程で、他者のまなざしが強い影響を与える。物語前半の田舎の生活は、周囲を身近な人々に取り囲まれた平和な世界であって、安全で純粋な子供の世界である。作品冒頭の段階、田舎で生活するニコレンカの意識は、いまだ子供らしい幼さの域を脱していない。ニコレンカの頭を占めているのは、単に外見的事実なことだけであり、大人と同じような格好がしたいという、素朴な願望に過ぎない。ニコレンカは大人らしい服装に憧れを感じる。そしてすでに大人らしい格好をしている年長の兄であるヴォロージャと自分を比較し、彼が羨ましくて仕方が無い。

Володе сапоги, а мне покуда еще несносные башмаки с бантиками. При нем мне было бы совестно плакать. (5)

ヴォロージャのは長靴だったが、私のはまだ忌々しいリボンつきの短靴である。彼の前で泣いたら、それこそ恥さらしだ。

狩に出かける場面でも、同じような場面を見ることが出来る。兄ヴォロージャの姿は、ニコレンカの目には、まるで大人そのもののように見えている。

На лошади же он был очень хорош – точно большой. Обтянутые ляжки его лежали на седле так хорошо, что мне было завидно, – особенно потому, что, сколько я мог судить по тени, я далеко не имел такого прекрасного вида. (22)

彼（ヴォロージャ）の乗馬姿はなかなか立派だった。まるで大人そっくりだった。きっちりズボンに包まれた腿は、実に格好よく鞍の上に落ちていて、羨ましいほどだった。特に影法師から判断したところ、私の風采などは遠く及ばないので、なおさら忌々しかった。

舞台がモスクワに移動してすぐ、祖母に会うためにニコレンカがはじめてモスクワ仕立ての燕尾服を着る場面で、ようやくニコレンカは兄と同じ（大人の）ズボンをはくことを許される。

“Наконец-то и у меня панталоны со штрипками, настоящие!” – мечтал я, вне себя от радости, осматривая со всех сторон свои ноги. Хотя мне было очень узко и неловко в новом платье, я скрыл это от всех, сказал, что, напротив, мне очень покойно и что ежели есть недостаток в этом платье, так только тот, что оно немножко просторно. (47)

「とうとう僕にも皮ひもの付いた本当のズボンが出来た！」嬉しさのあまり前後を忘れて、自分の足を見回しながら、私は夢見心地にこう考えた。新しい服は恐ろしく窮屈で、着心地が悪かったけれ

ど、私はそれを皆に隠して、返って非常に落ち着きがいい。もしこの服に不満があるなら、それは少しゆったりし過ぎることだ、などと言った。

上の引用のように、田舎で生活するニコレンカの意識を占めるのは、「大人らしい服装」と「大人のような外見」であり、それはまだ子供らしい素朴な欲望でしかない。特にニコレンカの場合、自分の美しくない容姿への悩みと、兄のヴォロージャに対する羨望が強く現れている。今まで自分と同じように育てられてきた兄は、すでに精神的にも肉体的にも一歩先に大人の仲間入りをしていて、そのことがニコレンカの気に障る。

しかし、生活の基盤が都会に移り、貴族的な大人達の常識に包まれて暮らすことになる、ニコレンカは貴族としての大人の常識、その影響を受け、大人らしく振舞おうとします。都会の生活とは、詰まるところ社交界や舞踏会を中心とした他者の世界、大人の世界であり、その中で暮らすうちに、少年は大人の常識に取り巻かれ、意識の変化が生じてくる。

## ② 不幸な人間に見られたい

ニコレンカの意識の変化が、最も良く窺われるのが、父と兄とともに田舎からモスクワへと旅立つ場面と、母の葬式の場面である。まずは父と兄とともに子供の世界である田舎から、大人の世界としての都会、モスクワへと旅立つ場面。

Я продолжал плакать, и мысль, что слезы мои доказывают мою чувствительность, доставляла мне удовольствие и отраду. (42)

私はいつまでも泣き続けた。そして、この涙が自分の多感な心を証明しているのだと思うと、私は満足と慰安を感じた。

『幼年時代』の中で最も重要な人物であり、幼い主人公の生涯に強く影響を与える母の葬儀の場面に際しても、他者にどう見られているかという考えがニコレンカの心を強く占めている。

Прежде и после погребения я не переставал плакать и был грустен, но мне совестно вспомнить эту грусть, потому что к ней всегда примешивалось какое-нибудь самолюбивое чувство: то желание показать, что я огорчен больше всех, то заботы о действии, которое я произвожу на других, то бесцельное любопытство, которое заставляло делать наблюдения над чепцом Мими и лицами присутствующих.[...]Сверх того, я испытывал какое-то наслаждение, зная, что я несчастлив, старался возбуждать сознание несчастья, и это эгоистическое чувство больше других заглушало во мне истинную печаль. (85—86)

葬式の前後にも、私はしきりに泣き続けて、いつも沈みがちであったけれど、この哀愁を思い出すのは、何となく良心がとがめるように感ぜられる。なぜなら、この悲哀の中にはいつも何か、利己的な感情が混じっていたからである。例えば、自分が誰よりも一番憂いに沈んでいる、ということ人を人に見せたがったり、他人に与える印象を気にかけたり、ミミイの室内帽や、居合わす人達の顔を観察するような、役にも立たない好奇心に支配されていた。[...]おまけに、私は自分が不幸なものだと感じることに、一種の快感を覚え、この意識を刺激することに勤めた。この利己的な感情が何よりも一番に、私の内部に潜んでいた真の悲哀を打ち消したのだ。

最愛の母親との別れ、別離に際して、悲しむべきであるという、大人社会の常識をニコレンカは意識している。彼は常に他人に与える印象を気にかけ、自分が誰よりも強く悲しんでいることを示そうとする。さらにそこには、他人に不幸な人間に見られたい、あるいは他者に同情されたいというナルシスティックな感覚が含まれている。

### ③ 社交的な人間に見られたい

ニコレンカの考える社交的な人間とは、上手く踊れ、女性に対して軽妙に興味深い会話をすることができる人間である。ここには、上手くフランス語を操れると言う能力も含まれる。次の引用は、祖母の家で開かれた舞踏会での一場面。ここでは、ニコレンカは、愛らしい少女ソーニャの目を意識して行動している。

...я помню, что, когда Володя, Этьен и я разговаривали в зале на таком месте, с которого видна была Сонечка и она могла видеть и слышать нас, я говорил с удовольствием; когда мне случалось сказать, по моим понятиям, смешное или молодецкое словцо, я произносил его громче и оглядывался на дверь в гостиную; когда же мы перешли на другое место, с которого нас нельзя было ни слышать, ни видеть из гостиной, я молчал и не находил больше никакого удовольствия в разговоре. (66)

...今でも憶えているが、ヴォロージャとエチエンと私は、広間の隅で話をしていて。それはソーニャの姿も良く見えれば、ソーニャの方でも私たちを見て、私たちの話を聞くことのできるような場所であった。私はいいい気持ちで喋っていた。そして、当時の私の考えで、何か滑稽なこととか、気の利いたことをいうような場合には、私はことさら声を高くして、客間の戸口を振り返った。けれど、私たちが席を移して、客間のほうから見えもしなければ聞こえもしなくなると、私は黙り込んでしまっ、話に何の興味も感じなくなった。

Я до того растерялся, что, вместо того чтобы танцевать, затоптал ногами на месте, самым странным, ни с тактом, ни с чем не сообразным образом, и наконец совершенно остановился. Все смотрели на меня: кто с удивлением, кто с любопытством, кто с насмешкой, кто с состраданием [...]Все презирают меня и всегда будут презирать... (71—72)

私はすっかりまごついてしまって、踊る代わりにその場で足踏みを始めた。それは拍子にも合わなければ、何とも釣り合いの取れない奇妙な格好だった。そのうちにとうとうすっかり立ちすくんでしまった。一同は私の顔を見つめていた。ある者は呆れたような、ある者は物珍しそうな、ある者は嘲るような、ある者は同情するような目つきで。[...]皆が私を軽蔑している、そしてこれから先ずつと軽蔑するだろう。

#### ④ (嬉しさを抑える) 紳士として見られたい

次の一文は、同年代の遊び仲間セリョージャとの出会いの場面。セリョージャを心から愛しているニコレンカは、彼を見るたびに、溢れ出ようとする愛情と喜びを、押し隠そうと努める。

Странно, отчего, когда я был ребенком, я старался быть похожим на большого, а с тех пор, как перестал быть им, часто желал быть похожим на него. Сколько раз это желание – не быть похожим на маленького, в моих отношениях с Сережей, останавливало чувство, готовое излиться, и заставляло лицемерить.[...] Каждое выражение чувствительности доказывало ребячество и то, что тот, кто позволял себе его, был еще мальчишка.[...] мы лишали себя чистых наслаждений нежной детской привязанности по одному только странному желанию подражать большим. (58—59)

奇妙なことだが、どういうわけか、私は子供のときには、大人に似ようと努めていたものだったが、もう子供でなくなってしまうと、今度は子供らしくなりたいという望みをよく起こす。セリョージャとの交渉においても、この子供らしく見られまいという望みが、今にも溢れ出そうになった感情を抑え、私に仮面を被らせた。[...] ちょっとでも感傷的な表現を見せると、それは子供らしさの証拠であり、そういう言行をするものは、まだ小僧っ子なのであった。[...] 私たちはただ大人らしく見せたいという奇怪な望みのために、子供らしい優しい愛着の純な喜びを失ったのである。

上に示したような、他者に大人らしく見られたいといった願望や、社会的な人間に見られたいという欲望は、「他者のまなざし」がニコレンカの内部に取り込まれていることを示している。特にモスクワでの生活を通じて、ニコレンカの内面に、「他者に見られている自分」と、「それを外から意識する自分」という、自己の二重性が現れることになる。

『幼年時代』においては、ニコレンカは常に外から自分を眺め、他人の目に映る自分を演出しようと努める。それは、ニコレンカの成長とともに、①外見を演出する、②内面を演出する、③④道徳性、社会性を演出する、というように、段階的に変化していくのである。

そして、『少年時代』『青年時代』へと物語が進むにつれて、この内部に取り込まれた「他者のまなざし」は、貴族的な人間の、完璧で理想像としてニコレンカの中で明確に意識化されていく。それが、『青年時代』で述べられる、一種の規範としての「紳士的 (Comme

il faut) 人間」の概念につながっていくと言える。「Comme il faut」の概念には、「あらゆるものに対する無関心と、ある種の洗練された、人を見下すような倦怠の表情を浮かべること」という項目が含まれている。すぐ上に引用した一文ではすでに、嬉しさを抑えることが大人らしいことであると言う意識がニコレンカの頭に表れており、このような概念は『幼年時代』の中で、すでにその芽生えを見ることができる。「Comme il faut」とは、一種の人間分類法であり、『青年時代』のニコレンカは、それ以外の人間とは関係を結ぶ価値がないと考える。その概念は、内在化された「他者のまなざし」から生じているといえる。

#### 4. ゴーリキー『幼年時代』における「監視する」他者のまなざし

同じ幼年期を扱った自伝小説でも、他者のまなざしの扱い方が全く異なるのが、ゴーリキーの『幼年時代』である。トルストイによって物語られる幼年時代とは、純粋で無邪気な貴族階級のものであったのに対し、ゴーリキーは同じ自伝的作品で、庶民の不幸せな幼年時代を描いた。

エイヘンバウムが、『若きトルストイ』において、トルストイの『幼年時代』について、「主人公の不在」、あるいは「短い場面の連なり」と証したことは非常に興味深い。<sup>4</sup> その指摘は、むしろゴーリキーの『幼年時代』について、より当てはまるものである。

ゴーリキーの『幼年時代』においては、劇的な物語としての大きな筋といったものは存在しない。主人公アレクセイは冷静な観察者として存在するのであって、通常の世界のように、作品中で起こる事件の主人公、主体として積極的に事件に関与してゆく物語世界の中心として存在するのではない。主人公は、彼を取り巻く人々たちや社会、自然を見る「目」として機能している。主人公アレクセイの成長は、社会の中で、彼の周囲に生きる他者との関係において描かれる。このことと関して重要だと考えられるのが、彼を取り巻く登場人物達の「まなざし」である。ここでは、トルストイのように内面化されるまなざしというものは現れない。

彼は他者と世界を「見る」と同時に、他者によって「見られ」ている。彼は主体として観察する者であるのと同時に、客体として観察されるものでもある。並外れて敏感な精神を備えつつ、劣悪な生活環境の中で生き抜いていくために、『幼年時代』作品冒頭から、幼い少年の中に極めて優れた観察者の視点が生じる。

主人公アレクセイが祖父母と同居するようになってから、毎日のように彼の目の前に繰り広げられたのは、押しなべて人間性への侮辱であり、それは大人であると子供であることを問わなかった。毎週土曜日になると祖父カシーリンは、その一週間に罪を犯した子供たちを誰彼の容赦なく片端から鞭打ちの刑に処した。祖父には、子供たちを体刑に処するということが悪い事だという意識は全くなかった。

<sup>4</sup> Эйхенбаум Б.М. Молодой Толстой // О литературе работы разных лет. М., 1987.



アレクセイも他の子供達と同じく、非人間的な体罰を受ける。アレクセイの小さいいたずらのために、祖父は意識不明になるまで彼を鞭で打った。意識を快復した後に、この事件を契機として、彼は自分を取り巻く現実を一層注意して観察するようになる。

Дни нездоровья были для меня большими днями жизни. В течение их я, должно быть, сильно вырос и почувствовал что-то особенное. С тех дней у меня явилось беспокойное внимание к людям, ... (23)<sup>5</sup>

(体罰を受けたために)寝込んでいた日々は、私にとっては人生の大きな日々だった。この数日の間に私は、おそらく大きな成長を遂げたに違いない。私は何か特別なものを感じた。この日以来、私の心に、人々を注意深く観察する目が現れた。

染物工場の暴君として君臨する祖父カシーリンに対して、アレクセイは強い恐怖を感じている。アレクセイは彼に監視されていることを強く感じており、へまをして殴られることを恐れ、さらに、誰かにそういったへまを告げ口されたりするのを極端に恐れた。少年が最も恐れるのは、祖父の鋭い緑色の「目」である。

Я хорошо видел, что дед следит за мною умными и зоркими зелёными глазами, и боялся его. Помню, мне всегда хотелось спрятаться от этих обжигающих глаз. (16-17)

私は祖父が賢そうな鋭い緑色の目で私を観察しているのをよく知っていた。そして私は彼を恐れていた。私はいつもこの火傷させるような目から隠れたいと思っていたのを覚えている。

総じて、主人公は、祖父母の家ではつねに自分を余所者として認識している。彼はつねに誰かの視線にさらされている。彼は自らを他者として感じ取っており、常に、他者の中にいる居心地の悪さを味わうことになる。そのため、彼は自己を守るためにあらゆる人間と事物を注視しなければならない。

作品冒頭、アレクセイの父の急死の後、彼の母は息子を連れて再び故郷の町ニージニー・ノヴゴロドに戻ってくる。息子は祖父母の元にあずけられることになる。次の描写は、ニージニー・ノヴゴロドの港に着いた船から降りて来た幼い主人公が、初めて彼の親類たちに出会う場面である。

И взрослые и дети – все не понравились мне, я чувствовал себя чужим среди них, даже и бабушка как-то померкла, отдалилась. (14)

<sup>5</sup> ゴーリキーの作品の引用は全て *Горький М. Детство; В людях; Мои университеты.* М.-Л., 1949 により、( ) 内にページ数のみを記す。日本語訳は大川によるが、『ロシア文学全集』第33巻 (ゴーリキーII)、東郷正延・和久利誓一・蔵原惟人訳、修道社、1959年を参照した(下線、強調は大川)。

大人も子供たちも、私はみんな気に入らなかった。私は彼らの中であって自分を他人と感じていた。  
祖母でさえも何となく色褪せて遠いものになってしまった。

さらに、祖父母の元で暮らし始めると、この疎外感はより強く主人公の心を占めることになる。そしてその疎外感が、周囲と他者を観察する目を強めることとなる。

Я чувствовал себя чужим в доме, и вся эта жизнь возбуждала меня десятками уколов, настроивая подозрительно, заставляя присматриваться ко всему с напряжённым вниманием. (36)

私はこの家の中で自分を余所者と感じていた。そしてこの生活全体が何十本という針で私を刺しながら私の心に疑惑を抱かせ、あらゆるものに対して心を研ぎ澄まして注視するように仕向けるの  
だった。

この他者の「目」についての描写は、『幼年時代』全体を通じて現れる。こういったまなざしの描写、見られることへの恐怖はゴーリキーの自伝小説の基底を流れる主要なテーマであり、『幼年時代』の続編である『人々の中で』、『私の大学』の中にも、主人公が成長するにつれて、減少して行くとはいえ、はっきりと見られるものである。

主人公はカシーリン老人の視線だけでなく、全ての他者の視線について、基本的に恐怖を感じている。他者の視線に対する恐怖は、当然のことながら主人公の行動にも影響を及ぼす。具体的な例として挙げられるのは、主人公の遊び仲間たちの憧れの的である、跛の少女リュドミーラに読書しようと誘われる、『人々の中で』(1916)の一場面。少女リュドミーラは、純粋で、他の人間たちと違って生活に押しつぶされていない。アレクセイと彼の遊び仲間たちは彼女を神聖なもの、自分達とは別の、他の世界に生きるものとして崇拜する。二人きりで本を読むために、アレクセイとリュドミーラは、他人に見られない場所を探そうとする。ここでゴーリキーによって、意識的に強調させるために、括弧付きの「見つかる」が使われる。

Людмила очень боялась, что нас “застанут”. – Знаешь, что тогда подумают? – тихонько спрашивала она.

Я знал и тоже опасался, как бы не “застали”. (219)

リュドミーラは「見つかる」のをとても恐れていた。「そうしたら、みんながなんと思うか分る?」  
と小さい声で彼女は尋ねた。私には分っていた。それで、私もまた「見つかる」ことがなければいいが、とびくびくしていた。

上記の例では、二人は単に恥ずかしいために他人から隠れようとするのではない。二人の住む町では、すべての人間が他人を落とし入れよう、他人の弱点を暴いてやろうとしてすべてのものを監視している。弱点を見せないために、他人につけ込まれないように生活しなければならない。そして彼らは常に、誰かに監視されているのを感じており、その恐ろしさを知っている。

ゴーリキーの自伝三部作の中では、この「見られる」ことの恐怖は、さらに前進した形で、人間を「監視する神」のテーマとも深く関わってくる。このテーマは主に『人々の中で』で展開されるが、三部作の中の独特な宗教観と関連する描写は、非常に興味深いものである。ゴーリキーにとっては、神ですら主人公を監視するまなざしとして機能している。

主人公は、彼のまわりの人間たちが信仰する神に二つのものが存在することをはっきりと認識していた。それは、慈愛と哀れみに満ちた「祖母の神」(бог бабушки)と、厳格で、罪ある人間を罰する「祖父の神」(дедов бог)である。『幼年時代』の主人公アレクセイの心は、一見すると全く異なる二つの方向性を持つ神の間で揺れ動く。祖母の信仰する神とは、全てのことを聞いてくれ、許してくれる、公正で身近な神である。祖母のお祈りは、正統的なものではないが、その分暖かく、心のこもったものである。祖母のお祈りは純粹で素朴なものであり、心から湧き出る祈りの文句は、そのために毎日違うものとなる。対して、祖父はこういった祖母のお祈りの仕方や、信仰を軽蔑しており、祖母を罵る。

祖父の信じる神は、秩序と厳格な掟を要求する。彼の唱えるお祈りは、常に同じ文句でなければならず、毎日毎日、一字一句変わらない。祖父の神は何よりもその残酷さが強調される。神の掟に従わないもの、掟を乱すものはすべて、その身の上に悲しみと破滅の罪が下る。いつも人間のはるか上に、暴君として君臨し、人間の罪を監視する神、罰を与える裁き手としての神である。こういった対照的な神の像が、同時に存在するのは興味深い。幼い主人公の中で、こういった二つの相容れない神の像は、全く混ざりあわないものとしてそのまま矛盾した形で保たれることになる。

Я, конечно, грубо выражаю то детское различие между богами, которое, помню, тревожно раздвояло мою душу, но дедов бог вызывал у меня страх и неприязнь: он не любил никого, следил за всем строгим оком, он, прежде всего, искал и видел в человеке дурное, злое, грешное. Было ясно, что он не верит человеку, всегда ждёт покаяния и любит наказывать[...]Бог был самым лучшим и светлым из всего, что окружало меня, – бог бабушки, такой милый друг всему живому. (82)

私がここで言う神々の間の子供らしい区別は、もちろん大まかなものである。しかしこの区別は、今でも覚えているが、私の魂を二つに引き裂いた。祖父の神は私の心に恐怖と憎悪を呼び起こした。この神は誰をも愛することなく厳しい目で一切のものを監視した。それは人間の中に、何よりもまず悪いもの、邪悪なもの、罪を探し、これを発見するのであった。このような神が人間を信じず、常に懺悔を期待し、罰することを好むのは明らかだった。[...]祖母の神は私を取り巻くすべてのもののうちで最もよい、最も輝かしいものだった。祖母の神は、生きとし生けるものにとって、この上なく優しい友だった。

主人公は、人々が信仰する本来は同一であるはずの神を、この「祖母の神」と「祖父の神」に分けて認識する。次の描写は、彼の奉公先の製図師の妻と、その母親の信仰する神についてのものである。

Обе женщины поклонялись сердитому богу моего деда, – богу, который требовал, чтобы к нему приступали со страхом; (258)

二人の女はどちらも私のお爺さんの恐ろしい神様を拜んでいた。それは、皆が恐怖の念を抱いて自分に接することを要求する神様だった。

Они вовлекали бога своего во все дела дома, во все углы своей маленькой жизни – от этого нищая жизнь приобретала внешнюю значительность и важность, казалась ежечасным служением высшей силе. Это вовлечение бога в скучные пустышки подавляло меня, и невольно я всё оглядывался по углам, чувствуя себя под чьим-то невидимым надзором... (258)

女たちは家の中のあらゆる事件に、自分たちのちっぽけな生活のあらゆる隅々に、自分の神様を引っ張り込んだ。そのために、乞食のような生活が外面的な荘厳さともったいらしさを帯び、至高な力への常住不断の奉仕のように見えた。つまりぬ些事の中にまでこのように神様を引っ張り込むことが私の心押し付けた。私はいつも誰かの見えない監視を受けているような気がして、思わず部屋の隅々を見回すのだった。

上の引用ではいささか異なったレベルで「視線」の描写が用いられている。この場合、主人公は他者のまなざしと同じように「祖父の神」の視線を感じている。主人公は厳格な「祖父の神」に監視されていて、主人公は祖父から感じられるのと同様の恐怖と嫌悪感を、この無慈悲で恐ろしい神から感じることになる。

ゴーリキーの主人公は、常に他者の目にさらされる、孤独な人物であり、この他者のまなざしは常に恐怖と侮辱をもたらすものとして、彼には恐怖の対象である。アレクセイは、ニコレンカと違い、他者の視線を内面に取り入れるということをしていない。

主人公アレクセイの頭上には、常に絶対的な権力者、恐怖をもたらす支配者が君臨している。それは、祖父母の家の中では無慈悲に罰を与える祖父であるし、奉公先では靴屋の主人になる。さらには神ですら恐怖を与える存在としての地位を占める。

ゴーリキーの主人公アレクセイは、彼の所属する集団のヒエラルキーに敏感である。その際、このヒエラルキーは上から与えられる恐怖と侮辱の形をとる。彼の念頭にあるのは、社会的な上下関係への反抗心であり、愛するものへの侮辱に対して、強い嫌悪感をもって、下から上への積極的な攻撃を行うのである。絶対的な高みから、無条件に下される侮辱と恐怖が、ゴーリキーの『幼年時代』のまなざしの基盤にあるのである。

以上のように、他者のまなざしというモチーフを用いて、トルストイとゴーリキーの自伝的作品を考察した。トルストイが純粋で汚れない幼年時代から、内的な成長を通じて純粋さを失い、大人になっていく主人公の内面を描いたのに対して、ゴーリキーの場合は、幼年期の子供の精神的、内面的な成長を描くというよりも、むしろ複雑で乱雑な社会の中に放り込まれた一人の人間の、生きる苦しみや苦悩を中心に描こうとした、ということができる。